

新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻中翻刻

駒井信勝

別所弘淳

松本亮太

一、はじめに

前稿（『現代密教』第三三号所収「新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻上翻刻」）では、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』三卷（資料番号・新文庫蔵五八八番（みー96））のうち、巻上の翻刻報告を行った。また併せて、中性院俊音房頼瑜（一二二六―一三〇四）撰『秘蔵宝鑰勘註』（以下、頼瑜『勘註』）、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』（以下、『新文庫本』）巻上、智山第七世元春房運敵（二六一四―一六九三）撰『秘蔵宝鑰纂解』（以下、運敵『纂解』）、堅康本『秘蔵宝鑰』（以下、『堅康本』）とで相違する本文中の読みをいくつかピックアップし、読みの変遷についての検討も行った。この翻刻報告と読みの変遷の検討を行う目的は、次のような前提に基づく。

・『新文庫本』の奥書には、慶讃版『十卷章』（宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年奉修記念出版『十卷章』（真言

宗智山派宗務庁、二〇二三）製作に当たって使用した、智山書庫所蔵の堅康・弘現・覚本の奥書と同様に、「頼瑜」・「純亮」・「賢秀」の名が記されていること。

・『新文庫本』は、運敵の校合が行われる以前の本であるため、頼瑜由来の読みが、運敵以降の本よりも、より反映されたものであると考えられること。

・『新文庫本』は、表紙裏に記される識語¹⁾に示されるように、頼瑜の訓点が記されるのみならず、根来寺の訓点をも付す大変貴重な史料であり、この頼瑜・根来寺の二様の読みが、運敵の影響を受けたと考えられる堅康・弘現・覚本の読みとは大きく異なるものであること。

すなわち、頼瑜『勘註』の読みと、『新文庫本』に付された運敵校合以前の読み、運敵『纂解』の読み、慶讃版『十卷章』に反映させた運敵校合以降の読みとを比較することで、智積院において「頼瑜の読み」と伝承される読みの変遷を明らかにすることができるのではないかと期待されるのである。この検討を行う基礎作業として『新文庫本』を翻刻して、頼瑜点・根来点の報告を行うこととした次第である。また、読みの変遷についての検討を行うことで期待される成果は、次の三点である。

- ① 頼瑜『勘註』と『新文庫本』の頼瑜点とを比較することで、頼瑜の著作から読み取ることができる「頼瑜の読み²⁾」と、智積院に伝承された「頼瑜の読み」に異同があるのかどうかを明らかにすることができる。
- ② 『新文庫本』の頼瑜点・根来点と運敵『纂解³⁾』とを比較することで、運敵が頼瑜点・根来点のいずれを重視していたのかを明らかにすることができる。
- ③ ②を踏まえたうえで、慶讃版『十卷章』の読みと比較することで、運敵以降の智積院における「十卷章」の修学においては、頼瑜点、根来点、運敵の読みのいずれが重要視されていたのかを明らかにすることができる。

以上のような経緯、目的に基づいて、本稿では引き続き、『新文庫本』巻中の翻刻報告と、読みの変遷に関する検討を行う。

二、書誌情報

本稿で取り扱う『秘藏寶鑰』巻中（第二帖）の書誌情報は以下の通りである。⁴

史料名・秘藏寶鑰 頁数・三帖 資料番号・新文庫蔵五八八番（み—96）

第二帖

版本。粘葉装。法量縦二五・〇糰×横一五・七糰。二八丁。頁六行、一行一七字。無界。書入（墨・朱）・仮名（墨・朱）・返点（墨・朱）・声点（墨・朱）・合点（墨・朱）・朱合符・朱引・朱区切点アリ。虫損アリ。料紙は楮紙（裝飾・具引）。表紙素紙。

外題（直書、表紙左上）「秘藏寶鑰巻中」表紙右上「五地函」

表紙裏「墨声墨仮名并点朱引朱ノ導朱ノ句切 頼—御点也

朱点朱仮名朱声以別本点了 是亦根来寺点也」

内題「秘藏寶鑰巻中」

尾題「秘藏寶鑰巻中」、尾題左「奉報 大師之遺恩為遂現當之／心願謹以開印板矣」

奥書「（御本云）永仁二年九月二日於中性院一部十卷私意楽任点畢是偏為初心／末学歟後賢判定而已 南山隱

老権律師頼瑜（春秋／六十九）

天文十三年三月十七日以御正本朱墨点畢 純亮

寛永四年(丁卯)八月十三日写点訖 正運 賢秀

印記(一丁右下、朱方印陽刻複廓)「妙智院」(縦五・〇糎×横二・〇糎)

三、『秘藏宝鑰』卷中より新たに付された記号について

本稿で取り扱う『秘藏宝鑰』巻中においても、前稿と同様に、『返り点』『合付』『区切り点』『声点』が付されている。これらの記号については、前稿第三節「本文に付される記号について」を参照されたい。本節では、本稿において取り扱う『秘藏宝鑰』巻中より新たに本文に付された、『合点』『朱引』の二つの記号について簡単に解説しておく。

《合点》⁽⁵⁾

文章中の項目や漢文の訓点などに、心覚えのために鉤型や「へ」の記号を付すること、またその付した記号のこと。回状などでは、合点を付することで「確かに認めた」ことを示す。また、和歌・連歌などで、よしとするものに鉤型のしるしを付すこと、またその付した記号のこと。本史料では巻中にのみ付される。

本史料に合点が付される理由は必ずしも明確ではないが、「第四唯蘊無我心」段の十四問答冒頭と、「第五拔業因種心」段の「復次有二種因有二種縁」「復次有二種因縁」が連続する部分に合点が付されていることから、文章の項目や区切りを強調する際に合点を付していると推測される。

《朱引》⁽⁶⁾

漢文訓読において、人名、地名、書名などを示すために朱で書き加えた記号のこと。本史料では人名と地名(王

朝名)に付される。

巻中の朱引(人物)は、人名の下部中央に「一」と付される。例えば、「伶倫」(音律を定めたとされる伝説上の人物)には「伶倫一」、「義猷」(東晋時代の名筆家である王羲之と王猷之)には「義一猷一」のように、基本的に一人物につき「一」が一つ付されている。ただし、一箇所のみ「孔李」(孔子と老子)と二名であるにもかかわらず、「孔李一」と「一」が一つだけ付されている。巻中の王朝名に付される朱引は、「夏」「殷」のように、文字の右側に「一」が付されている。

なお、巻下「第九極無自性心」段にも人名に付される朱引が若干みられるが、ここの朱引は巻中の付し方とは異なり、「杜順」「智儼」「法藏法師」のように、人名を貫くように「一」が付されている。

四、凡例

- 1 本稿は新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の本文に書き加えられた、ルビ、送り仮名、返り点、合付、声点等の「訓読のための加点」の翻刻である。
- 2 原則として、原本において黒色で記されている文字や記号は黒色、朱で記されているものは灰色で示した。(黒、朱の区別については、表紙裏の識語(注1)参照)
- 3 声点が同一箇所にも黒と朱の両方記されている場合、例外として「●」で示した。
- 4 返り点、合付、声点などの記号については、つとめて原本に記されている位置と同様の位置に示した。(各記号の意味については、前稿第三節、ならびに本稿前節参照)
- 5 史料中に文字や記号の所在が確認できるが、虫損や汚れにより判読が困難な箇所には□を記した。

- 6 返り点について、現代の用法とは異なる使用例が見られるが、原本の表記通りに示した。
- 7 比較の便宜のため、体裁は慶讃版『十卷章』【本文編】に合わせた。原本の改頁の位置には*を付し、丁数を下部に記した。
- 8 原本では本文の漢字について旧字・略字・異体字が混用されているが、すべて常用漢字に改めた。
- 9 新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に表記されている漢字と、慶讃版『十卷章』で使用されている漢字が異なる箇所には、下部に※にて異同を記した。
- 例：新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』「花」 慶讃版『十卷章』「華」 ※花∴華
- 10 ㄱ・ㄷ・ㅁなど略字仮名は現行の字体に改めた。

五、本文

秘藏宝鑰卷中

第四唯蘊無我心

若夫鉛刀終無鏌耶之績泥蛇豈有応龍之能燕石濫珠璞鼠

名涉名実相濫由來尚矣然則勝數諦名梵延仏号長爪実相

憤子絶言徒勞解脱之智未知涅槃之因

是故大覺世尊說此羊車拔出三途之極苦解脱八苦之業縛

其為教也三藏広張四諦普観三十七品為道助四向四果即

人位

言識唯六無七八告成三生六十劫防非則二百五十修善即

四念八背半月説罪持犯立顕一夏随意凡聖乍別秃頭割衣

※蘊：蘊

*一丁右

*一丁左

鉄杖鋼盂行則安徐護虫坐則低頭數息斯則身之標儀言殺

*二三右

言収即知淨之語行雲廻雪即死尸之想斯乃心口之灰屑塚

間閉目白骨在心聚落分衛簾飯吐想樹葉遮雨誰願聖室糞

掃除風何必紉綺

生空三昧知神我之幻陽無生尽智断煩惱之後有其通也則

虧蔽日月顛覆天地目徹三世身現十八石壁無礙虛空能飛

*二丁左

其德也則輪王頂接积梵婦依八部供奉四衆欽仰遂乃厭五

蘊之泡露惡三途之塗炭欣等持之清涼廓同大虚湛然無為

※蘊：蘊
☆132頁參照

何其樂乎尚身智之灰滅乘之為趣大休如此

存法故唯蘊遮人故無我簡持為義故唯

※蘊：蘊

憂国公子問玄関法師曰今聞声聞乘人及法既知道妙人天

*三丁右

人超^ト積^{タル}輪^{コトヲ}六^ニ通^上具^ニ足^シ三^ニ明^ニ円^ニ滿^{セリ}人^ノ天^ノ所^ロ仰^ク福^ト田^レ是^レ馮^ニ理^ト誠^{マコトニ}可^シ然^ル

所^ニ以^テ前^ニ來^ル聖^{セイ}帝^ノ賢^ニ臣^ト廣^ク建^{タテテ}伽^ヲ藍^ヲ安^ス置^ス僧^ノ人^ヲ割^{サイテ}万^ニ戸^{コト}而^{シテ}鳴^{ナラシ}鐘^ヲ開^テ千^ニ

頃^{ケイヲ}斷^テ食^{シヨク}馮^ス仰^ク非^ニ他^ト只^ク在^リ鎮^ニ押^リ國家^ヲ利^ス濟^ス黎^ニ元^ケ元^上

然^ラ今^ニ所^ア在^{ユル}僧^ノ尼^ト剃^{ソツテ}頭^ヘ不^ラ剃^ラ欲^テ染^テ衣^ヲ不^ラ染^メ心^ヲ戒^セ定^シ智^ハ慧^ト乏^ト於^ト麟^ノ角^{ヨリモ}

非^レ法^ヲ濫^ハ行^ハ鬱^{サカ}於^リ龍^ノ鱗^ニ日^{ヨリモ}夜^ニ經^ニ營^{シテ}叩^ク頭^ニ臣^ノ妾^ノ之^ノ履^ハ朝^ニ夕^ニ苞^ハ苴^シ屈^ス膝^ス

僕^{ボク}媿^シ之^ノ足^ニ積^ル風^ノ因^テ茲^ニ陵^ニ替^リ仏^ノ道^ノ由^テ之^ニ毀^キ廢^ス早^カ滂^{ラウ}荐^シ至^リ疫^エ癘^レ年^{コト}起^リ

天^ノ下^ノ版^ハ盪^ク公^ノ私^シ塗^ト炭^{タンスル}職^{モト}此^レ之^ノ由^ヨ也^ニ不^シ若^{シカ}一^ニ切^{セツ}停^{ヤメ}度^ト絶^ト供^ト若^シ有^ラ羅^ハ

漢^ノ得^ル道^者屈^{シテ}身^ト頂^ニ敬^ム傾^テ國^ヲ供^{セム}給^{マク}而^{シテ}已^ム

師^ノ曰^ク善^ニ哉^ハ斯^ノ問^ク多^ク有^リ利^ニ益^ヲ宜^ク子^ノ開^キ伶^{リン}倫^カ之^ノ聰^シ耳^ヲ借^カ顏^カ子^ノ之^ノ敏^ヒ心^ヲ

諦^カ聽^キ善^ク思^ヘ且^ク拳^テ一^ニ二^ヲ襄^カ子^ノ之^ノ迷^イ

夫^レ蟪^{セウ}蛄^{メイ}不^レ見^ル大^ノ鵬^ノ之^ノ翼^ツ翼^ハ蜩^{エン}何^ソ知^シ難^シ陀^ノ之^ノ鱗^{イロク}蝸^{クワ}角^{カク}不^レ得^ス衝^{ツク}穹^{コト}昊^{カウ}

* 四丁右

* 三丁左

- 111 -

之頂^{キヲ}。焦^{セウ}。僥^{ケウ}。何能^{ソク}。踐^{フマン}。溟渤^{マイ}。之底^{ホウ}。生^ハ。盲^ハ。不^レ。見^ル。日^ニ。月^ヲ。聾^{カク}。駘^{カク}。不^レ。聞^ク。雷^ヲ。鼓^ヲ。愚^カ。

少^カ。之^ヲ。分^ク。蓋^シ。如^シ。此^キ。乎^カ。

又^レ。夫^ニ。物^リ。有^リ。善^ニ。惡^ニ。人^ヒ。殊^{ナリ}。賢^ニ。愚^ニ。賢^ニ。善^ニ。者^ノ。希^ニ。愚^ニ。惡^ニ。者^ノ。多^シ。騏^シ。驎^シ。鸞^シ。鳳^シ。禽^シ。獸^シ。

之^キ。奇^シ。秀^{ナル}。者^ノ。也^{ナリ}。摩^ニ。尼^ニ。金^ニ。剛^ハ。金^ニ。石^ノ。之^レ。靈^ニ。異^{ナル}。者^ノ。也^{ナリ}。人^ノ。之^レ。挺^ニ。粹^{ナル}。者^ノ。賢^ニ。聖^ニ。帝^ノ。

之^ナ。称^ハ。首^ニ。者^ノ。堯^ノ。舜^ノ。后^ニ。美^ニ。文^ニ。母^ニ。臣^ノ。歎^ル。元^ニ。凱^ニ。驎^ニ。鳳^ノ。一^ニ。見^ル。則^チ。天^ノ。下^ニ。大^ニ。平^ニ。摩^ニ。

剛^ヒ。一^ニ。目^ニ。則^チ。万^ノ。物^ノ。應^ル。声^ニ。聖^ニ。君^ノ。出^レ。世^ニ。四^ノ。海^ノ。無^ク。為^ル。賢^ニ。臣^ノ。輔^ニ。機^ノ。一^ニ。人^ノ。垂^ル。拱^ル。

雖^レ。然^シ。聖^ニ。君^ノ。希^ニ。遇^フ。千^ノ。載^ニ。一^ニ。御^ニ。賢^ニ。佐^ニ。難^シ。得^ル。五^ノ。百^ノ。一^ノ。執^ル。摩^ニ。尼^ノ。空^ノ。聞^ク。名^ヲ。驎^ニ。

鳳^ノ。誰^カ。見^ル。矣^ハ。然^レ。則^チ。不^レ。見^ル。驎^ヲ。鳳^ヲ。不^レ。可^ク。絶^ツ。羽^ヲ。毛^ヲ。之^レ。族^ヲ。不^レ。得^ル。如^ク。意^ヲ。不^レ。可^ク。抛^ル。

金^ノ。玉^ノ。之^レ。類^ヲ。堯^ノ。舜^ノ。不^レ。再^レ。生^ル。天^ノ。下^ノ。之^レ。主^ヲ。何^ソ。無^ク。元^ニ。凱^ニ。不^レ。更^ニ。出^ル。率^ヲ。土^ノ。之^レ。臣^ヲ。

豈^ニ。休^セ。孔^シ。驎^シ。既^ニ。摧^ク。好^ム。儒^ヲ。之^レ。輩^ヲ。每^ニ。邦^ノ。連^テ。袂^ヲ。李^ノ。牛^ノ。已^ニ。西^ニ。求^ル。道^ヲ。之^レ。徒^ヲ。每^レ。累^ル。

側^ソ。肩^ハ。代^ヨ。無^ト。扁^ト。華^ト。医^ト。道^ト。何^ソ。不^レ。断^ル。時^ニ。絶^ク。羿^ノ。養^ル。武^ノ。術^ト。誰^カ。可^ク。廢^ル。師^ト。鍾^ル。感^ル。天^ト。

* 四丁左
※ 騏驎：麒麟

※ 驎：麟

※ 驎：麟

* 五丁右
※ 驎：麟

※ 驎：麟

絲^シ綺^キ義^ウ獻^ウ応^ス仙^ノ龍^ノ管^{クワ}其^ノ人^ノ既^ニ往^{ユキ}其^ノ術^カ誰^カ得^{タル}然^{トモ}猶^ヲ所以^{ユハ}彈^カ指^マ聒^ス耳^ニ
*五丁左

書^ケ札^{カス}汚^ウ目^メ並^ニ皆^ナ不^ル得^{ナリ}罷^{ヤム}為^{コト}之^ヲ猶^ヨ賢^{ナリ}然^ハ則^チ羅^{カシ}漢^{コケ}聖^{レハ}果^{ナリ}一^ハ生^ニ難^シ得^レ是^ヲ

故^ニ鈍^ニ根^ハ六^ハ十^ハ劫^ハ利^ハ智^ハ則^ハ三^ハ生^{ナリ}修^ス練^ス苦^シ行^シ乃^シ証^ス聖^ノ位^ヲ雖^モ無^ク向^フ果^ト之^ヲ

賢^ニ聖^ニ其^ノ道^ヲ何^ゾ絶^ス哉^ヤ

公^カ子^カ曰^ク賢^ノ聖^ノ難^キ遇^ヒ誠^ニ其^レ然^レ也^{ナリ}持^テ戒^ヲ智^ヲ慧^ヲ何^ゾ其^レ未^ク聞^ク思^フ

師^ノ曰^ク時^ニ有^リ增^ス減^ス法^ニ有^リ正^ニ像^ニ增^ス劫^ノ之^ハ日^ハ人^ト皆^ナ思^ヒ十^ハ善^ヲ減^ス劫^ノ之^ハ年^ハ家^ニ
*六丁右

好^ム十^ハ惡^ヲ正^ニ法^ニ千^ハ年^ノ内^ニ持^テ戒^ヲ得^テ道^ヲ者^ノ多像^ノ法^ニ千^ハ載^ノ外^ニ護^ス禁^ス修^ス德^ノ者^ノ

少^ク当^テ今^ニ時^ハ是^レ濁^ニ惡^ニ人^ニ根^ニ劣^ニ鈍^{ナリ}依^イ佛^キ其^ノ道^ニ髣^ハ髴^ヒ其^ノ風^ニ妙^ク道^ヲ難^ク鑽^キ輕^ク

毛^ヲ隨^フ風^セ斯^レ乃^チ蒼^ニ天^ニ西^ニ傾^ム群^ク星^カ何^カ東^{セン}黃^ク輿^ヨ震^シ裂^レ草^ノ木^ソ何^ソ靜^カ

公^カ子^カ曰^ク若^シ如^ク還^ク答^ノ時^ニ根^ニ所^レ牽^ヒ逆^ク流^リ猶^ヲ難^シ若^シ然^ラ者^ハ五^ハ濁^ニ惡^ニ世^ニ定^テ無^ク
*六丁左

持^テ戒^ヲ定^メ慧^ヲ人^ト乎^ヤ

師ノ日。何為其然乎。夫雖円蓋西転。日月東流。南斗随運。北極不

移。冬天尽。殺松柏。不彫陰氣。凍水潮。酒不氷。紂民編戸。可戮然。

猶三人称仁堯。戸比屋可封。然猶四凶受殛。火日燒物。布鼠遊

中。水能溺人。龍鼈泳内。以此觀之。雖云有同者。亦有不和者。由

此而言。時雖濁濫。何無其人乎。

公子曰。既知有人。其人安在乎。

師曰。大方無隅。大音希声。大白若辱。大直若屈。大成若欠。大盈

若冲。玄德玄同。非聖孰知。知人之病。古聖亦難。

公子曰。和光同塵。抑有前聞。然猶山藏玉。而草木

光彩。衝尋躅。知形見煙。悟火有智。有行何必難知。

師曰。物無心。故現相。人含心。故叵弁。

※彫…濁

* 七丁右

* 七丁左

公子曰。既聞聖賢。不易弃。然猶佛法蠹國僧人。蚕食其益。安在※蚕…蠶乎。

師曰。有益無益。後更陳答。且拳大綱。示道俗之損益。今問子問。

不思佛法。流传只在憂國家之損益。並忠臣義士誠可然也。

夫所以建國設職樹君御民。本非為幸天下而供君王屠海內。

而給臣佐。當以為與天下之父母。澆萬人塗炭。然則御馬之法。

非鑣策不能馭人之道。非教令不得是故。垂五常之法。導四海。

之人。五經三史。示其正路。金科玉条。防其邪逸。若使主上行之。

則天下無為。黎下遵之。則宇內無事。君臣父子之禮有序。上和。

下睦之義無欠。然今誦詩者無溫惠淳和之心。讀禮者忘恭儉。

揖讓之志。懲惡勸善。春秋所宗。潔靜精微。周易攸尊。拳代披誦。

*八丁左

*八丁右

誰^カ契^カ孔^{コウ}丘^{キウ}之^ノ誠^{セイ}合^カ周^{シウ}公^{コウ}之^ノ勸^{ケン}能^ネ誦^ソ能^ネ言^{ゴン}鸚^{イン}鵒^{トク}能^ネ為^キ言^{ゴン}而^{シテ}不^ス行^ハ何^ニ

異^イ猩^{シウ}猩^{シウ}又^{マタ}夫^フ百^{ハク}工^{コウ}代^{ダイ}天^{テン}九^ク牧^{ボク}馭^{キヨ}人^{ジン}七^{シチ}道^{ダウ}五^ゴ畿^キ之^ノ長^{チヤウ}三^{サン}百^{ハク}六^{ロク}十^{ジュウ}之^ノ守^{シウ}県^{ケン}県^{ケン}

令^{レイ}尉^{エイ}鄉^{キヤウ}里^リ正^{セイ}家^ケ家^ケ父^フ子^シ門^{メン}門^{メン}百^{ハク}姓^{セイ}其^キ數^{スウ}無^ム量^{リヤウ}貴^キ賤^{ケン}無^ム辺^{ヘン}然^ニ猶^{ユウ}

行^{コウ}仁^ニ義^ギ者^{シャ}幾^キ何^ニ修^{シウ}忠^{チュウ}孝^{コウ}者^{シャ}幾^キ許^{シヨ}慎^{シン}守^{シュ}礼^{レイ}信^{シン}者^{シャ}有^{ユウ}幾^キ不^ス犯^{ハン}律^{リツ}令^{レイ}者^{シャ}

幾^キ人^{ジン}並^ニ皆^{ケル}上^{ジョウ}下^ゲ讀^{ダク}文^{モン}不^ス慎^{シン}其^キ行^{コウ}貴^キ賤^{ケン}口^{コウ}是^シ心^{シン}行^{コウ}悉^{シツ}非^ヒ諺^{エン}曰^{イツ}擊^{キツ}日^{ニツ}擊^{キツ}孝^{コウ}

經^{キヤウ}打^{ダイ}母^ボ頭^{トウ}蓋^{ガイ}斯^シ之^ノ謂^イ也^ヤ不^ス曾^{ソウ}顧^コ自^ジ己^キ乖^ケ越^{エツ}法^{ポフ}教^{キヤウ}還^{エン}談^{タン}毀^キ他^タ人^{ジン}違^ヒ

犯^{ハン}經^{キヤウ}法^{ポフ}所^ソ謂^イ蔽^{ヘイ}己^キ靡^ミ脚^{キヤク}發^{ハツ}他^タ腫^{シュウ}足^{ソク}者^{シャ}也^ヤ如^ニ公^{コウ}子^シ所^ソ論^{ロン}天^{テン}下^ゲ所^ソ有^{ユウ}

百^{ハク}工^{コウ}令^{レイ}長^{チヤウ}並^ニ皆^{ケル}乖^{ケル}法^{ポフ}者^{シャ}多^タ率^{ソツ}土^ド所^ソ有^{ユウ}元^{ゲン}元^{ゲン}忠^{チュウ}孝^{コウ}希^シ聞^{ブン}三^{サン}教^{キヤウ}皆^{ケル}是^シ

一^{イツ}人^{ジン}之^ノ所^ソ弘^{コウ}伝^{デン}何^ニ以^テ積^{シク}緇^シ違^ヒ犯^{ハン}吹^{フイ}毛^{モウ}求^{モトメ}瑕^{ケガレ}儒^{ニウ}素^ソ邪^{ジャ}非^ヒ含^{カン}弘^{コウ}不^ス紕^キ

又^{マタ}夫^フ諸^{シュ}寺^ジ封^フ戶^コ不^ス出^デ一^{イツ}万^{マン}僧^{ソウ}尼^ニ嚼^{セツ}粒^{リツ}不^ス過^ケ一^{イツ}鉢^{ハツ}誦^ソ經^{キヤウ}札^{シツ}弘^{コウ}報^{ポウ}國^{コク}

又^{マタ}夫^フ諸^{シュ}寺^ジ封^フ戶^コ不^ス出^デ一^{イツ}万^{マン}僧^{ソウ}尼^ニ嚼^{セツ}粒^{リツ}不^ス過^ケ一^{イツ}鉢^{ハツ}誦^ソ經^{キヤウ}札^{シツ}弘^{コウ}報^{ポウ}國^{コク}

※札：禮

*九丁左

*九丁右

家ノ^{*}恩^ニ觀^ル念^ス坐^シ禪^{ハス}答^ニ四^ノ恩^ノ之^ヲ德^ヲ然^ラ今^マ俗^ニ素^ノ衣^ハ食^ハ或^ハ食^ハ二^ノ万^ノ戸^ノ之^ヲ侯^ハ

*十丁右

或^ハ費^ニ千^ノ乘^ノ之^ヲ國^ヲ百^ノ里^ノ之^ヲ宰^{サイ}三^ノ公^ノ之^ヲ職^シ戸^シ坐^サ溪^{ケイ}壑^{カク}碩^{セキ}鼠^ソ尾^ヒ間^リ空^{ナリ}食^ハ

人^ト禄^ヲ徒^ラ受^ラ人^ノ宮^ノ八^ノ元^ノ之^ヲ美^ニ五^ノ臣^ノ之^ヲ德^ヲ伊^イ尹^{オヒ}負^カ斲^ナ公^ノ望^ハ垂^{ケル}釣^ツ張^ツ良^カ

*宮…官

三^ノ略^ヲ陳^ヘ平^ヘ六^ノ奇^キ如^ク是^ノ之^ヲ功^ヲ如^ク此^ノ之^ヲ德^ヲ何^ヲ以^テ不^エ聞^シ若^シ責^メ僧^ノ尼^ノ之^ヲ一^ノ

鉢^ヲ何^ヲ不^ル撿^カ俗^カ素^ノ之^ヲ多^ク費^ス

*十丁左

於^コ是^コ公^ニ子^ニ忙^ハ然^ト無^シ言^シ喟^キ然^ト良^ク久^ク日^ク俗^ノ官^ノ俸^{ホウ}禄^ハ官^ノ位^ノ所^ナ当^{タル}加^シ以^テ星^{ホシ}

出^テ星^ニ入^リ櫛^カ風^{ツリ}沐^{ユス}雨^ニ日^ニ夜^ニ在^ア公^コ何^コ以^カ辞^シ讓^シ至^シ如^ク僧^ノ尼^ノ誦^レ經^ヲ礼^ス二^ノ仏^ノ堂^ヲ

上^ニ宴^ニ坐^シ任^シ意^ニ修^ス行^ス何^カ能^ク諷^ク一^ノ卷^ノ之^ヲ般^ニ若^ク礼^シ一^ノ仏^ノ之^ヲ名^ヲ号^ヲ報^シ二^ノ國^ノ家^ヲ

之^ノ鴻^{コウ}恩^ヲ答^{セン}四^ノ恩^ノ之^ヲ広^ク德^ヲ乎^ヲ

師^ノ曰^ク公^ノ子^ノ之^ヲ言^フ雖^モ似^ト是^ニ然^モ未^タ知^ラ妙^ヲ夫^レ法^ノ名^ニ諸^ノ仏^ノ之^ヲ師^ト一^ノ仏^ノ則^チ伝^フ法^ヲ

*十一丁右

之^ノ人^ナ一^ノ句^ノ妙^ノ法^ハ億^ニ劫^ニ難^ク遇^ヒ一^ノ仏^ノ名^ハ字^ハ憂^モ曇^モ非^レ喻^ニ是^ノ故^ニ雪^ノ童^ノ投^ケ身^ヲ

*憂…優

精進剥皮。滿界財宝不如一句之法。恒沙身命不比四句之偈。

輪王為床喜見燒身。良有以也。称一仏名号。消無量重罪。讚一

字真言。獲無辺功德。何況一鉢。飯四種恩德。何以不酬。

公子曰。此言迂誕。未足信受。吾師孔李。不曾吐言。若誦經為功。

礼仏為績。吾亦誦五經三史之文。礼周旦孔丘之像。与此何別。

又五經之文。三藏之字。文字是同。誦持何異。

師曰。公子之言。乍聞似是熟思。天殊深義。乍難信。且以譬說之。

夫勅詔。官符与臣下。往來文字。是同功用。太別如勅書。一命則

天下奉行。施賞施罰。百姓喜懼。如来經法。亦復如是。菩薩声聞

天龍八部。何人。不信。当知外書。如百姓之文。一仏經。如天子之勅。

是故。釈帝誦之。摧修羅之軍。閻王跪之。礼受持之人。未有誦五

*十二丁右

*十二丁左

謗レ法定墮^ニ阿鼻獄^ニ更無^シ出期^一世人不知^レ斯義^一任^セ舌輒談^シ不顧^リ深^ニ害^ヲ寧^ロ可^ク三日^ト夜^ニ作^ル二十^一惡^一五逆^ヲ一言^一語^モ不合^レ謗^ス人法^ヲ一行^ス殺盜^ヲ現^ニ得^ニ衣食^シ之利^ヲ謗^ス人法^ヲ者於^レ我何益^一

公子^カ曰^ク謹承^シ示南^ヲ而自^レ今以後^ハ不敢^テ違犯^セ

公子^カ曰^ク既承^レ不可^レ謗^ス人法^ヲ然未^タ委^テ人法^ニ有^ル幾種^一為^ハ當^リ有^ル深淺^一乎^ク

師曰^ク大而論^ス之有^リ二種^一一顯教法^ニ二密教法^{ナリ}顯教中^ニ又^ク二言^ク一

乘^ト三乘^ト別故^ニ一乘者^ハ如来他受^リ用身^ニ從^リ十地^ニ至^マ初地^ニ所^レ現報身

所^レ說^ク一乘法^ニ是也^一三乘者^ハ応^レ化^リ釈迦^ニ為^ル二乘^一及^テ地^ニ前菩薩等^ノ所^レ

說^ク經^ト是也^一密教者^ハ自性法^ニ身大毘盧遮那^ノ如来^ト與^リ自眷屬^ト自受

法^ニ樂^ニ故^ニ所^レ說^ク法^ニ是也^一所謂^ク真言乘者^ハ是也^一如是^ノ諸經^ニ法契^ニ當^レ其

機^ニ根^ニ並^ニ皆^ナ妙藥^{ナリ}隨^テ其^ノ經^ニ教^ニ菩薩造^リ論^ヲ人師作^ル疏^ヲ末^ノ代^ノ弟子依^テ斯

*十四丁左

*十四丁右

經論ニ・誦シ・誦シ・修行ス・斯レ・乃チ・人法ノ・之ハ・差別也・淺深ハ・福罰ハ・如シ・十住心論ニ・
公カ・子カ・曰ク・今ニ・聞ク・師ノ・說ヲ・己ニ・知ヌ・人法ノ・之ハ・別ナ・然ル・今ニ・造ル・諸論ノ・疏ヲ・者ノ・皆シ・破レ・他ヲ・立スル・
自ラ・不レ・成ラ・謗ト・法ト・耶ヤ・

師ノ・曰ク・菩サ・薩ノ・用ハ・心ハ・皆テ・以テ・慈ヲ・悲ヲ・為シ・本ト・以テ・利ヲ・他ヲ・為レ・先キト・能ク・住シテ・斯ノ・心ニ・破シテ・淺ハ・執ヲ・

入ルルハ・深ハ・教ニ・利益モ・尤モ・広シ・若シ・挾サシハ・名ニ・利ノ・心ヲ・執シテ・淺ハ・教ヲ・破スルハ・深ハ・法ヲ・不レ・免スレ・斯ノ・尤トカフ・

公カ・子カ・曰ク・既ニ・蒙カフルニ・提テ・撕セイヤ・心ヲ・霧ヲ・忽ニ・消エ・然モ・猶ヲ・有リ・心ニ・中ニ・未タ・決セ・者ノ・何イ・者ノ・既ニ・承ヌ・雖トセ・

無ト・得レ・道ノ・者ノ・其ノ・道ノ・不レ・可ラ・絶エ・具セル・戒ヲ・慧ヲ・者モ・若コトク・辱ケカレタルカ・若シト云コトク・味ヲ・然ル・今ニ・見ニ・世ヲ・間ヲ・逃アウ・役トセ・

者ノ・衆ヲ・奸ヲ・盜ノ・者ノ・多シ・御キヨル・代ヨラ・聖ヲ・皇ヲ・佐ク・時ヲ・賢ヲ・臣ヲ・見テ・斯ノ・彌ノ・猴ノ・不レ・能ハ・默モクシ・忍フ・仏ト・教ト・
*十五丁左

王ト・法ト・相ト・和ト・如ト・何ト・

師ノ・曰ク・此ニ・有リ・二ハ・種ハ・一ハ・悲ハ・門ハ・二ハ・智ハ・門ナリ・大ハ・悲ハ・之ハ・門ハ・開ユルシテ・而ク・無ク・遮スルコト・大ハ・智ハ・之ハ・門ハ・

制シテ・而シ・無シ・開スルコト・制ト・門ハ・如シ・涅ハ・槃ハ・薩サ・遮シヤ・等ノ・經ノ・悲ハ・門ハ・如シ・十ハ・輪ハ・等ノ・經ノ・相ハ・和セシ・與シテ・奪タツアリ・

坐^サ 賊^{サウシ} 断^{コトハル} 而^ノ 已^ミ。又^{マタ} 人^{ヒト} 王^{オウ} 法^{ホフ} 律^{リツ} 法^{ホフ} 帝^{テイ} 禁^{キン} 戒^{ケイ} 事^{コト} 異^{コトナレトモ} 義^ギ 融^{セリ} 任^ニ 法^{ホフ} 控^{コウ} 馭^{キヨス} 利^リ 益^{エキ}

甚^タ 多^シ 狂^{マケテ} 法^{ホフ} 随^{ヘハ} 心^{シン} 罪^{ズイ} 報^{サタメテ} 極^{キョク} 重^シ 世^セ 人^{ヒト} 不^{シテ} 知^ラ 斯^ノ 義^ギ 不^レ 細^{クハシク} 王^{オウ} 法^{ホフ} 不^レ 訪^{ラハ} 仏^{ブツ} 法^{ホフ} *十六丁右

随^テ 愛^{アイ} 憎^{ソウ} 而^ニ 浮^フ 沈^{チン} 任^シ 貴^キ 賤^{ケン} 而^ニ 輕^{ケイ} 重^{ジュウ} 以^テ 此^{コノ} 馭^{キヨ} 代^{ダイ} 後^{ノチ} 報^{ホウ} 何^{ナニ} 免^{レム} 不^レ 可^ク 不^レ 慎^シ *十六丁右

不^レ 可^ク 不^レ 慎^シ *十六丁右

又^タ 公^{コウ} 子^シ 先^{ケン} 所^ノ 談^{タン} 早^{ソウ} 滌^{ワウ} 疫^{エキ} 癘^{レイ} 天^{テン} 下^カ 版^{ハン} 盪^{カウ} 僧^{ソウ} 人^{ニヒト} 之^ノ 所^ノ 招^{ナリトイフク} 者^ハ 此^レ 亦^タ 不^レ 然^ラ

子^チ 未^タ 見^ミ 大^{ダイ} 道^{ダウ} 妄^{ミタリ} 吐^{ハケリ} 斯^ス 言^{ゲン} 今^{イマ} 当^{トテ} 攬^{トク} 秦^{シン} 鏡^{ケイ} 臨^{リン} 子^シ 面^{メン} 若^{ニシ} 災^{サイ} 由^ユ 非^ヒ 法^{ホフ} 之^ノ 僧^{ソウ}

尼^ニ 者^{シヤ} 堯^{ヤウ} 代^{ダイ} 九^ク 年^{ネン} 之^ノ 水^{スイ} 湯^{トウ} 時^ジ 七^{シチ} 載^{サイ} 之^ノ 早^{ソウ} 如^シ 是^ノ 早^{ソウ} 由^ユ 誰^{レノ} 僧^{ソウ} 而^ニ 興^{キョウ} 彼^ノ *十六丁左

時^ジ 無^シ 僧^{ソウ} 何^{ナニ} 必^ズ 由^ユ 僧^{ソウ} 夏^カ 運^{ウン} 顛^{テン} 覆^{フク} 殷^{イン} 祚^{ソク} 夷^イ 滅^{ヘツ} 周^{シュウ} 末^{マツ} 絶^{ケツ} 癩^{ライ} 秦^{シン} 嗣^シ 早^{ソウ} 亡^{ワウ} 並^ニ *癩：廢

皆^ハ 禍^{ワサハ} 起^{キリ} 三^{サン} 女^{ニョ} 運^{ウン} 随^フ 天^{テン} 命^{メイ} 其^ノ 日^{ジツ} 無^シ 僧^{ソウ} 豈^ニ 預^{アツケンヤ} 仏^{ブツ} 法^{ホフ} 夫^レ 災^{サイ} 禍^ワ 之^ノ 興^{キョウ} 略^{リツ} 有^リ

三^{サン} 種^{シュウ} 一^{イツ} 時^ジ 運^{ウン} 二^ニ 天^{テン} 罰^{バツ} 三^{サン} 業^{ギヤク} 感^{カン} 時^ジ 運^{ウン} 者^{シヤ} 所^ノ 謂^{イフ} 陽^{ヤウ} 九^ク 百^{ハク} 六^{リク} 堯^{ヤウ} 水^{スイ} 湯^{トウ} 早^{ソウ}

当^{レリ} 之^ニ 是^レ 故^コ 聖^{セイ} 帝^{テイ} 出^テ 宸^{シン} 見^ミ 機^キ 逆^{ギャク} 備^ビ 滅^{メツ} 劫^{ケツ} 五^ゴ 濁^{ダク} 亦^タ 是^レ 天^{テン} 罰^{バツ} 者^{シヤ} 由^ユ 教^{キョウ} 令^{メイ} *十七丁右

辺^{リニ}被^レ縛^セ。如^レ是^ノ邪^ノ見^ノ行^ノ。不^レ可^ニ勝^ラ計^{カソウ}。此^ノ生^ニ作^テ惡^ノ業^ヲ。後^ニ当^ニ墜^ツ。三^ニ途^ニ。三^ニ途^ニ之^ハ苦^{テモ}。經^レ劫^シ難^シ免^{マヌカレ}。如^レ來^ノ慈^ノ父^ノ見^テ此^ノ極^ノ苦^ヲ。說^{下フ}其^ノ因^ヲ。說^{テハ}惡^ノ因^ヲ。果^ヲ拔^{ヌキ}其^ノ極^ノ苦^ヲ。示^{シテハ}善^ノ因^ヲ。果^ヲ授^{下フ}其^ノ極^ノ果^ヲ。

* 十八丁左

修^{スル}其^ノ教^ヲ者^ノ略^リ有^ニ二^ニ種^ニ。一^ニ出^ニ家^ニ。二^ニ在^{ナリ}家^ト出^ト家^ハ者^ハ剃^{ソリ}頭^ヘ染^ル衣^ヲ。比^丘尼^等是^レ也^{ナリ}。在^ト家^ト者^{キカシムリ}戴^レ冠^シ絡^シ纓^シ。優^シ婆^シ塞^シ。優^シ婆^シ夷^等是^レ也^{ナリ}。上^ミ達^{イタリ}天^子下^モ及^フ凡^ソ。庶^シ持^テ五^ノ戒^ヲ十^ノ善^ヲ等^ヲ。婦^{スル}依^ニ仏^ノ法^ノ者^ハ皆^ナ是^レ也^{ナリ}。言^フ菩^ト薩^ハ者^ハ如^シ是^レ在^ル家^ノ人^シ持^シ十^ノ善^ヲ戒^ヲ六^ノ度^ノ行^ヲ者^ハ是^レ也^{ナリ}。出^{セル}家^ノ發^セ大^ノ心^ノ者^ハ亦^{ナリ}是^レ斷^{スルカ}惡^ヲ故^ル離^ル苦^ヲ修^{スルカ}善^ヲ故^ウ得^モ樂^リ下^リ從^ル人^ニ天^ニ上^{マテ}至^ス仏^ノ果^ニ皆^レ是^レ斷^ス惡^ヲ修^ス善^ヲ之^ヲ所^{ナリ}感^{スル}得^ニ為^カ示^ス斯^ノ兩^ヲ趣^ヲ大^{マウケ}聖^ケ設^テ教^ヲ。佛^ノ教^ニ既^ニ存^ス弘^{セリ}行^リ在^ル人^ト是^レ故^ニ知^ル法^ヲ者^ハ出^テ家^ヲ。伝^フ灯^シ仰^フ道^ヲ者^ハ入^テ道^ニ改^ム形^ヲ。經^ク云^ク若^シ有^テ国^ニ王^ト父^ト母^ト放^{ユル}人^ヲ民^ヲ男^ヲ女^ヲ等^ヲ令^ム出^ス家^ヲ入^ル道^ニ所^レ得^ル功^ノ德^ノ無^ク量^{ナリ}無^ク辺^{ナリ}有^ル僧^ト尼^ト故^ニ佛^ノ法^ハ不^レ絶^ユ。佛^ノ

* 十九丁右

法ルカニ存ト故人ナ皆ク開コ眼ニシテ眼ニシテ而シテ行フ正カ道ニ遊ニ正ニ路ニ故ニ至ル涅ニシカノミナラス槃ニ加ニ以テ經ル法ニ *十九丁左

所ヲ在ハ諸アラユル仏マ護ス念シ諸ヲ天ノ守ス衛ス如シ是レ利ニ益ニ不レ可ク勝ケテ計ス

公カ子ク曰ク知リ法ヲ弘ムル道ヲ者ノ利ノ益ヲ灼シヤク然セシナリ非ニ法ニ非ニ經ニ者ノ何ソ其レ滿テル國ニ乎ヤ

師ノ曰ク大ニ山ノ德ハ広ク禽ノ獸ノ争ハ歸ス葉ニ毒ニ雜ル生ス深ク海ノ道ハ大ニ魚ノ鱉ノ集ス泳ル龍ノ鬼ノ

並ヒ住ス宝ノ珠ノ之ノ辺ニ必ズ有テ惡ニ鬼ノ困シ遶シ宝ノ藏ノ之ノ側ニ定テ有テ盜ニ賊ノ窺キ竄ス美ニ女ノ

不レ招カ好ク醜シユ之ノ男ノ争ソヒ逐フ医ノ門ハ不レ召ス疾ノ病ノ之ノ人ノ投イクリ歸ヲモムク腥ナクサキ肉ニシクニハ集アリ蟻オホクサキ臭カハ子屍ニ *二十丁右

聚アツム蠅ハエ聖ハ王トモ不レ言フ万ノ國ハ競キワフ婦ヲ王ノ巨キニ壑キヨ不レ思フ千ノ流カクハ各レ朝ノ宗ノ富フ人ハ不レ呼トモ

貧ヒ人ノ集リ智ヲ者モ默シ之ノ童マウ矇アツマル聚キ明ケイ鏡ミカキ瑩メツレハケン淨シ妍シ蚩ノ之ノ像カタチ現シ之ニ清ニ水ノ澄タナレハ湛タタケレハ

大カチ小ウツル之ノ相ニ影ヲ之ノ大ニ虚レトモ無レ心モ万ノ有イフ容イル之ノ大ニ地ハ無レ念トモ百ノ草イツ出ユリ之ノ堯ノ子ハ

不レ肖セウナリシカトモ父ナリキ聖ノ舜ノ父ハ欲セシカトモ殺コサント子ハ孝アリキ孔ノ子ノ門ノ徒ハ其ノ數ナレトモ三ノ千ノ達ハ者ノ則ハ七ノ十ノ其ノ *二十丁左

余ハ則ハ不レ註シルサ積セシナリ尊ス弟ノ子ハ無レ量ナレトモ無レ數ニ六ノ群ノ天ノ授ス善ニ星ノ比ハ丘ノ濫ス行テ極カリキ多ク

如^{イマセシヒスラス}來^{ナレコトヲニ}在^{ハツコフヤ}日^{スエヤ}不^{アヤシムニ}得^{タラン}純^ヤ善^{モハ}何^ヲ況^ハ末^ニ代^{タリ}之^ク裔^ニ乎^カ然^ニ猶^ハ如^ニ來^{タリ}慈^ク悲^ク三^ニ界^{タリ}為^ス

父^{チチ}賢^{ナシ}愚^{シテ}善^{シテ}惡^{シテ}何^{シテ}不^{シテ}喞^{ナシ}喞^ト物^ト理^{ナシ}如^{シテ}是^{シテ}何^{シテ}足^{ナシ}怪^ト乎^カ雖^{トモト}然^ニ變^{シテ}毒^ト為^{ナシ}藥^ト化^{シテ}

鉄^ヲ為^{ナシ}金^ト堯^ト戶^ト可^ク封^{ホウス}桀^{ケツカ}民^ハ可^シ誅^{チウシツレ}斯^レ乃^ノ時^ノ運^ノ之^ロ所^{イダス}致^{クワウ}皇^ク風^ノ之^{ナリ}所^{ムル}染^ル迦^ニ

葉^{ヒラカム}如^ニ來^ニ明^ニ說^ニ所^ニ由^ノ事^ヲ具^ニ見^{ヘタリ}守^リ護^リ国^ノ經^ニ文^{ケレハス}煩^レ不^レ抄^セ要^ノ覽^ノ者^ノ閱^{ミヨク}耳^ニ

頌曰

建^ト立^ト与^ト無^ト淨^ト雖^{トモ}深^{シト}未^{スレ}斷^セ煩^ヲ空^ク談^{シテ}内^ノ外^ノ我^ヲ輪^ス轉^ス生^ノ死^ノ樊^ニ

大^ト聖^ト開^ト羊^ト乘^ト修^{スレハウ}觀^{スレ}得^{スレ}涅^ヲ槃^ト五^ト停^ト四^ト念^ト処^ト六^ト十^ト三^ト生^ト觀^ト

二^ニ百^ニ五^ニ十^ニ戒^ニ持^{スレハ}之^ル離^ル八^ニ難^ヲ人^ノ空^ニ無^ク漏^ク火^ト滅^{シテ}智^ヲ身^ヲ心^ヲ禪^ト

*タマタマ^{スレハ}如^ノ來^ノ警^ニ廻^ス心^ス菩^ノ薩^ノ寬^ニ上^ニ

問^ニ此^ハ心^ハ亦^テ依^テ何^ノ經^ニ論^ニ建^{スルヤ}立^{スルヤ}耶^ヤ答^ス大^ニ日^ノ經^ニ菩^ノ提^ノ心^ノ論^{ナリ}彼^ノ經^ニ論^ニ何^カ說^ク

經^ニ云^ク謂^ク如^ク是^ク解^{シテ}唯^ニ蘊^ニ無^ク我^ヲ根^ノ境^ノ界^ニ淹^ル留^シ修^ス行^ス又^ク云^ク聲^ノ門^ノ衆^ノ住^{シテ}有^ニ

※蘊：蘊
※門：門
※聞：聞

*二十一丁左

*二十一丁右

縁地^ニ識^{サトリテ}生^ヲ滅^キ除^ニ二^ヲ辺^ヲ極^ニ觀^ニ察^ヲ智^{フモテウ}得^ニ不^レ隨^ニ順^ニ修^ニ行^ヲ因^ヲ是^ヲ名^ク聲^ト聞^ニ三^ヲ
 味^ト道^ト又^シ云^フ若^シ聲^ヲ聞^ニ所^ヲ說^ニ真^ハ言^ハ一^ノ一^ノ句^ヲ安^ス布^ス菩^{セリト}提^ス心^ヲ論^ヲ証^ヲ文^ハ与^ト下^ニ
 文^ノ心^ロ雜^ヘ拳^ル故^ニ不^レ別^ニ抄^セ行^ヲ相^テ臨^ニ下^ニ可^シ知^ス
 *二十五丁右

第五 拔業因種心

拔^レ業^ヲ因^ニ種^{トイフハ}心^者麟^ノ角^ノ之^ヲ所^ヲ証^ニ部^ヲ行^ニ之^ヲ所^{ナリ}行^シ觀^ニ因^ヲ縁^ヲ於^テ十^ニ二^ニ厭^フ生^ニ
 死^ヲ乎^ヲ四^ニ五^ニ見^テ彼^ノ華^ヲ葉^ヲ覺^{トリ}四^ノ相^ノ之^ヲ無^ク常^ヲ住^{シテ}此^ノ林^ヲ落^ニ証^ス三^ノ昧^ヲ於^テ無^ク言^ニ
 業^ヲ惱^ル株^ヲ机^ヲ猶^{ヨテ}此^レ而^レ拔^キ無^ク明^ノ種^子因^テ之^ニ而^レ斷^ス爪^ヲ犢^ヲ遥^{ハルカニ}望^メ不^レ近^ニ建^{ツカフ}聲^ニ
 何^ソ得^ン窺^キ竄^{ユスルコトヲ}游^{ユウ}泳^{エイ}湛^シ寂^シ之^ヲ潭^ヲ優^{イウ}遊^{イウス}無^ク為^ル之^ヲ宮^{ヤニ}自^ラ然^ノ尸^ヲ羅^{シテ}無^ク授^{コト}而^レ具^シ
 無^ク師^ヲ智^ヲ慧^ヲ自^ラ我^ニ而^レ獲^{タリ}三^ノ十^ノ七^ノ品^ヲ不^レ由^ラ他^ニ悟^リ蓋^ミ處^ヲ界^ヲ善^ハ不^レ待^タ藍^ヲ色^ヲ
 身^ヲ通^フ度^ス人^ヲ不^レ用^ニ言^ヲ語^ヲ大^ニ悲^ヲ闕^テ無^ク方^ヲ便^ス不^レ具^セ但^シ自^ラ尽^シ苦^ヲ証^{シテ}得^ス寂^ヲ滅^ヲ
 *二十二丁左
 ※蓋…纏

故^ニ經^ニ云^ク。拔^ク業^ト。煩^ト惱^ト。株^ト机^ト無^ク明^ノ種^ノ子^ノ生^ス。十二^ト因^ト緣^ト。又^ニ云^ク。是^レ中^ニ辟[。]支[。] *二十三丁右

仏^ハ復^リ有^リ小^シ差^キ別^ク。謂^ク三^ニ昧^分異^ニ淨^ス除^ス於^レ業^生。 *二十三丁右

釈^シ云^ク。謂^ク十二^ト因^ト緣^ト者^ハ。守^レ護^レ國^經云^ク。復^ニ次^ニ善^ノ男^子如^レ來^ハ於^テ一^ニ切^ノ靜[。]

慮[。]解[。]脫[。]等[。]持[。]等[。]至[。]伏[。]滅[。]煩[。]惱[。]生[。]起[。]因[。]緣[。]皆[。]如[。]實[。]知[。]仏[。]云[。]何[。]知[。]謂[。]

知^ヘ衆^ノ生^ノ煩^ノ惱^ノ生^ノ起^ス。以^テ何^ノ因^ヲ生^シ。以^テ何^ノ緣^ヲ生^シ。滅^シ惑^ヲ清^ク淨^ク。何^ノ因^ヲ能^ク滅^シ。何^ノ

緣^ヲ能^ク滅^ス。 *二十三丁左

此^ノ中^ニ煩^ノ惱^ノ生^ス。因^ト緣^ト者^ハ。謂^ク不^レ正^ノ思^惟。以^テ此^ヲ為^シ其^ノ因^ト。無^レ明^ヲ為^シ緣^ト。無^レ明^ヲ

為^シ因^ト。行^ヲ為^シ緣^ト。行^ヲ為^シ因^ト。識^ヲ為^シ緣^ト。識^ヲ為^シ因^ト。名^ヲ色^ヲ為^シ緣^ト。名^ヲ色^ヲ為^シ因^ト。六^ヲ處^ヲ

為^シ緣^ト。六^ヲ處^ヲ為^シ因^ト。觸^ヲ為^シ緣^ト。觸^ヲ為^シ因^ト。受^ヲ為^シ緣^ト。受^ヲ為^シ因^ト。愛^ヲ為^シ緣^ト。愛^ヲ為^シ因^ト

取^ヲ為^シ緣^ト。取^ヲ為^シ因^ト。有^ヲ為^シ緣^ト。有^ヲ為^シ因^ト。生^ヲ為^シ緣^ト。生^ヲ為^シ因^ト。老^ヲ死^ヲ為^シ緣^ト。煩^ト惱^ヲ

為^シ因^ト。業^ヲ為^シ緣^ト。見^ヲ為^シ因^ト。貪^ヲ為^シ緣^ト。隨[。]眠[。]煩[。]惱[。]為^シ因^ト。現[。]行[。]煩[。]惱[。]為^シ緣^ト。此^ハ

*二十四丁右

*二十三丁左

是煩惱生起因縁ナリ

云何衆生滅諸煩惱所有因縁有二種因有二種縁云何為二ト

一者從他聞種種隨順法声二者内心起於正念復次有二種リ

因有二種縁能令衆生清淨解脱謂奢摩他心一境故毘鉢舍ニ

那能善巧故復次有二種因有二種縁不來智故如來智故復ニ

次有二種因縁微細觀察無生理故近解脱故復次有二種因リ

縁具足行故智慧解脱現在前故復有二種因縁謂尽智故無ト

生智故復有二種因縁隨順覺悟真諦理故隨順獲得真諦智ヲ

故此是衆生除滅煩惱清淨因縁如來悉知下ヘリ

復次善男子煩惱因縁無有數量解脱因縁亦無有數量或有下ニ

煩惱能与解脱以為因縁觀実体故或有解脱能与煩惱以為中ニ

*二十四下左

*二十五下右

因緣上生スルカ執ヲ著ニ故

頌曰

緣覺鹿車無言說
部∞行麟角類不同ナリ

因緣十二深觀念
修習百劫具神通ヲ

*イチ拔業煩惱及種子
灰身滅智如虛空ニ

湛然久醉臥三昧
蒙警廻心一如宮ニ

問此住心亦依何經論說耶答大日經菩提心論彼經論何說ク

經云緣覺拔業煩惱株机無明種子生スルトヲ十二因緣ヲ離タリ建立宗等ヲ

如是湛寂一切外道所不能知先ルコト宣說ナリ離タリ一切過ヲ又言緣覺ハ

深ク觀察因果住シテ無言說法不レ轉無言說トイハテ於一切法証極滅語言ニ

三昧是為緣覺三味道又云秘密主若住シテハ緣覺聲聞所說真言ニ

*二十五丁左

*二十六丁右

摧^{〇〇}害^{スト}於^ヲ諸^ヲ過^ヲ。又云。声聞所說真言。一一句安^{セリ}布^ノ。是中^ニ辟^{〇〇}支^ハ。復

有^リ小^{シキ}差^ハ別^ク。謂^ク三^ニ昧^ニ分^ニ異^ニ淨^ス。除^ス於^ス業^ヲ生^一。

龍猛菩薩。菩提心論云。又二乘^ノ之^ハ人^{アリ}。声聞^ハ執^シ四^ノ諦^ノ法^ヲ。緣^ハ覺^ハ執^ス十^ニ。

*二十六左

二因緣。知^テ四^ニ大^ニ五^ニ陰^ヲ畢^ク。竟^ク磨^ク滅^ス。深^ク起^テ厭^ヲ。離^テ破^シ衆^ノ生^ノ執^ヲ。勤^{シテ}修^フ本^ノ法^ヲ。

剋^ク証^ス其^ノ果^ヲ。趣^フ本^ノ涅^ニ槃^ニ。已^ニ為^ル究^ト。竟^ト真^ニ言^キ行^フ者^ニ。當^ニ觀^ス二^ノ乘^ノ之^ハ人^ハ。雖^レ破^ト。

人^ノ執^ヲ。猶^シ有^リ法^ノ執^ヲ。但^シ淨^{メテ}意^ヲ識^ヲ。不^レ知^ル其^ノ他^ヲ。久^ニ久^ニ成^ス果^ヲ。以^テ灰^ケ身^ヲ滅^レ智^ヲ。

趣^{ヌレハノ}其^ノ涅^ニ槃^ニ。如^{シテ}太^ニ虛^ノ。空^ノ湛^{トシテ}然^{ナリ}。常^ニ寂^有定^ニ性^者。難^レ可^ク發^ス生^ス。要^{カス}待^テ劫^ノ限^ニ。

*二十七右

等^ノ滿^ヲ。方^{サニチ}乃^シ發^ス生^ス。若^シ不^レ定^ニ性^者。無^ク論^ク劫^ノ限^ヲ。遇^レ緣^ハ便^チ廻^ク心^ヲ。向^ス大^ニ從^リ化^ス。

城^ヲ起^ク。以^テ為^ス超^ク三^ニ界^ヲ。謂^ク宿^{ムカシ}信^ニ。故^ニ乃^シ蒙^フ諸^ノ佛^ノ菩^ノ薩^ノ。加^フ持^フ力^ヲ。而^{シテ}以^テ方^ヲ。

便^チ遂^ニ發^ス大^ニ心^ヲ。乃^シ從^ク初^メ十^ニ信^ヲ。下^モ遍^{シテ}歷^ク諸^ノ位^ヲ。經^ク三^ニ無^ク數^ノ劫^ヲ。難^ク行^フ苦^{シテ}行^フ。

然^{シテ}得^ル成^ス佛^ト。既^ニ知^ヌ聲^ノ聞^ノ緣^ノ覺^ハ智^ヲ。慧^ハ狹^{ナレハ}劣^{スト}。亦^フ不^レ可^ク樂^ス。

法、十住論云若墮聲聞地及辟支佛地若爾者是大衰患如助道*二十七丁左

若墮聲聞地スルニハ及辟支佛地ヒ是名菩薩死ヲ則失一切利チ

若墮於地獄スルニハ不生如是畏スセ若墮二乘地ルヲハ即為大怖畏チ

墮於地獄中スルハ畢竟得至佛シテ若墮二乘地シスレハ畢竟遮佛道シテ

仏自於經中ミラ解說如是事コトヲ如人貪壽者ク斬首則大畏キルヲ

菩薩亦如是モ若於聲聞地シ及辟支佛地ヒ應生大怖畏シ

秘藏宝鑰卷中

☆ 新文庫本：等持之清涼廓同大虛湛然無為何其業乎尚身智之灰滅
慶讚版……等持之清涼尚身智之灰滅廓同大虛湛然無為何其業乎

六、分析ノート

前稿にて、頼瑠『勘註』、『新文庫本』、『堅康本』を比較し、『秘蔵宝鑰』巻上における相違する読みをピックアップして、二つの表から検討を試みた。

本稿においても前稿に引き続き同様の比較を行い、『秘蔵宝鑰』巻中における読みの異同についての分析を試みる。

(一) 表(1)について

表(1)は、『新文庫本』において頼瑠点・根来点が併記されている箇所を抽出したものである。この表によって、頼瑠『勘註』の読みと、『新文庫本』に示される頼瑠点の読みの異同を検討する。

表(1)

	頼瑠『勘註』	『新文庫本』	運敵『纂解』	『堅康本』
3	若かじ、一切に度を停めて、供を絶たんには	根…一切に度を停(や)め、供を絶たんには 若かじ	若かじ、一切に度を停(とど)めて、供を絶たんには	若かじ、一切に度を停めて、供を絶たんには
2	天下の版盪	根…天下の版盪 頼…天下の版盪	天下の版盪	天下の版盪
1	禿頭割衣し鉄杖銅盃あり	頼…禿頭割衣にして鉄杖銅盃す 根…禿頭割衣して鉄杖銅盃す	禿頭割衣し鉄杖銅盃あり	禿頭割衣し鉄杖銅盃あり

17	戒慧を具せる者は	根・戒慧を具せる者	戒慧を具せる者	戒慧を具せる者は
16	為当(はた)	根・為わく・当に	為当(はた)	為当(はた)
15	何ぞ脱れん	根・何(い)ずく・んか脱れん	何ぞ脱れん	何ぞ脱れん
14	斯の言、導うこと莫れ	根・斯の言、導うこと莫れ、斯の言	導うこと莫れ、斯の言	版・斯の言、導うこと莫れ 朱・導うこと莫れ、斯の言
13	乍(たちまち)に	根・乍(たちまち)に	乍(たちまち)に	乍(たちまち)に
12	續(わざ)と為ば	根・續(せき)と為ば	續(せき)と為ば	續(わざ)と為ば
11	多費を檢えざる	根・多き費を檢えざる	多費を檢えざる	版・多くの費を檢えざる 朱・多費を檢えざる
10	忠孝を修むる	根・忠孝を修(お)むる	忠孝を修する	忠孝を修むる
9	天下を宰(つかさど)つて	根・天下を宰(さい)して	天下を宰(さい)して	版・天下を宰て 朱・天下を宰(さい)して
8	古聖も亦た難しとせり	根・古聖すら亦た難(なや)めり・ 古聖すら亦た難(は)ばかる 根・亦た難(かた)くせり	古聖も亦た難しとせり	版・古聖も亦た難くせり 朱・古聖も亦た難しとせり
7	火・曰(まこと)に	根・火は曰わく	火は曰わく・曰(こ)に	版・火・曰(まこと)に 朱・火は曰わく
6	年は家ごとに	根・年には家(い)えい	年は家ごとに	年は家ごとに
5	何ぞ絶えん哉	根・何ぞ絶えん哉	何ぞ絶えん哉	何ぞ絶えん哉
4	其の人既に往(送り仮名なし)	根・其の人既に往く	其の人既に往きぬ	其の人既に往く

頼瑠『勘註』の読みと『新文庫本』の読みを比較すると、次のようになる。

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
： 一一の句、安布せり。是の中に	り 何の因をもつて能く滅し、何の縁をもつて能く滅すと知りたまえ	之れに因つて抜き、無明の種子、之れに因つて断ず。爪犢：	然れども猶お	出家入道せ令むる	大慈樂を与え、大悲苦を抜く	斯の言を吐く	代を馭む	事異に義融ぜり	相和に与奪あり	然るを今
根：一一の句、是の中に安布せり。	頼：一一の句、安布せり。是の中に： 根：何の因をもつて能く滅し、何の縁をもつて能く滅すと知りたまえり うことを知りたまえり	頼：此れに猶つて抜き、無明の種子、之れに因つて断ず。爪犢： 根：此れに猶つて無明の種子を抜き、之れに因つて爪犢断ず。	根：然らば猶お 頼：然れども猶お	根：出家入道せ令め 頼：出家入道せ令むれば	根：大慈樂は与奪し、大悲は抜苦す 根：大慈樂を与え、大悲苦を抜く	根：斯の言を吐く、斯の言を吐けば	根：代を馭めん	根：事異なれども義融ぜり	根：相和せんこと与奪し、相和与奪あり 根：相和と与奪して	根：然るに今
： 一一の句、安布せり。是の中に	り 何の因をもつて能く滅し、何の縁をもつて能く滅すと知りたまえり	之れに因つて抜き、無明の種子、之れに因つて断ず。爪犢：	然れども猶お	出家入道せ令むる	大慈は樂を与え、大悲は苦を抜く	斯の言を吐く	代を馭す	事異にして義融ぜり	相和するに与奪あり	然るに今
一一の句、安布せり。是の中に：	何の因をもつて能く滅し、何の縁をもつて能く滅すと知りたもう	此れに猶つて抜き、無明の種子、之れに因つて断ず。爪犢：	然れども猶お	出家入道せ令むる	大慈樂を与え、大悲苦を抜く	斯の言を吐く	代を馭む	事異にして義融ぜり	相和に与奪あり	版：然るを今 朱：然るに今

- (1) 頼瑜『勘註』の読みと『新文庫本』の頼瑜点の読みが同じもの：23.5.6.9.14.16.18.25.26.28
 (2) 頼瑜『勘註』の読みと『新文庫本』の根来点の読みが同じもの：10.12.13.21.22.23
 (3) 頼瑜『勘註』の読みが『新文庫本』の頼瑜点・根来点の読みのみならずとも異なるもの：1.4.7.8.11.15.17.19.
 20.24.27

巻中においても前稿と同様の比較を行ったところ、(1)をみると、頼瑜『勘註』の読みと『新文庫本』の頼瑜点と同じ読みをするものは十一箇所あったのに対して、(2)(3)のように、頼瑜点と相違する読みをするものは十七箇所みられた。

このことから、前稿の比較結果と同様、『新文庫本』に付される頼瑜点は、頼瑜『勘註』の読みとは異なるものが多数あることがわかった。したがって、前稿の分析より導き出された、『新文庫本』に付される頼瑜点があくまでも「賢秀に伝承された頼瑜の読み」であるのではないかという推測が、巻中においても成立することが確認できた。

次に、『新文庫本』と運徹『纂解』の読みを比較すると以下のようになる。

- ① 『新文庫本』の頼瑜点の読みと運徹『纂解』の読みが同じもの：23.5.6.12.16.25.26.28
 ② 『新文庫本』の根来点の読みと運徹『纂解』の読みが同じもの：7.9.13.14.17.18.20.22
 ③ 『新文庫本』の頼瑜点・根来点の読みと運徹『纂解』の読みが異なるもの：1.4.8.10.11.15.19.21.23.24.27
 ④ ③のうち、運徹『纂解』と頼瑜『勘註』の読みが同じもの：18.11.15.24.27

『新文庫本』と運敵『纂解』の読みを比較すると、①にみられる通り、『新文庫本』の頼瑜点と同じ読みをするものが九箇所、②にみられる通り、根来点と同じ読みをするものが八箇所ある。また、③にみられるように、頼瑜点・根来点のいずれとも異なる読みをするものが十一箇所ある。したがって、ここにおいても前稿と同様の結果が得られた。すなわち、運敵『纂解』の読みは、『新文庫本』の頼瑜点・根来点のいずれかを重視したのではなく、頼瑜点・根来点を適宜選択したものだといえる。さらに③④をみる限り、運敵は、『新文庫本』のみならず、少なくとも頼瑜『勘註』を含めた他の史料も参照し、校合したことを読み取ることができる。

(二) 表(2)について

表(2)は、『堅康本』において朱書きが加えられている箇所を抽出したものである。この表によって、運敵『纂解』の読みと、『堅康本』の読みとを比較検討する。この検討によって前稿と同様に、運敵の読みが『堅康本』に伝承されているのかを確認する。

表(2)

	頼瑜『勘註』	『新文庫本』	運敵『纂解』	『堅康本』
1	殺を言い、収を言うに	殺れと言ひ、収めよと言うに	殺を言い、収を言うに	版殺を言い、収を言うに 朱殺れと言ひ、収めよと言うに
2	且(かつが)つ	且(しはら)く	且(しはら)く且(かつが)つ	版且(しはら)く 朱且(しはら)く且(かつが)つ
3	人、賢愚殊なり	人に賢愚殊なり	人、賢愚殊なり	版人に賢愚殊なり 朱人、賢愚殊なり

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
<p>当に以て天下の父母と与にして、万人の塗炭を漉わんが為なり</p>	<p>民を御むる</p>	<p>和光同塵は</p>	<p>古聖も亦た難しとせり</p>	<p>屈くじ)なけたるが</p>	<p>火、曰(まこと)に</p>	<p>堯戸は屋を比べて封ず可し</p>	<p>紂民は戸を編んで戮す可し</p>	<p>日月は東流す。南斗は随い</p>	<p>摧(うせ)んじかども</p>	<p>誰か実を見る</p>	<p>奇秀なる／霊異なる</p>
<p>当に以て天下の父母与して、万人塗炭を漉わんが為なり</p>	<p>民を御むる</p>	<p>光を和けて塵に同ずることは</p>	<p>根、古聖すら亦た難(なや)めり、古聖すら亦た難(はば)かる亦た難(かた)くせり</p>	<p>屈せるが、屈くじ)けたるが</p>	<p>根、火は曰わく</p>	<p>堯の戸は比屋にして(屋を比べて)封しつ可けれど</p>	<p>紂が民、編戸にして戮しつ可けれど、戸を編んで戮し可かりしかども</p>	<p>日月は東流し、南斗は随つて</p>	<p>根、摧(くだ)け□しかども</p>	<p>誰か実を見ん</p>	<p>奇秀なる／霊異なる</p>
<p>当に以て天下の父母と与んじて、万人の塗炭を漉わんが為なり</p>	<p>民を御する</p>	<p>和光同塵は</p>	<p>古聖も亦た難しとせり</p>	<p>屈くじ)けたるが</p>	<p>火は曰わく、曰(こ)に</p>	<p>堯戸は比屋、封ず可し</p>	<p>紂民は編戸、戮す可し</p>	<p>日月は東流す。南斗は随い</p>	<p>摧けしかども</p>	<p>誰か実を見たる</p>	<p>奇秀なる／霊異なる</p>
<p>版、当に天下の父母と与んじて、万人の塗炭を漉わんと以為えり、朱、当に以て天下の父母と与んじて、万人の塗炭を漉わんが為なり</p>	<p>版、民を御する</p>	<p>版、和光同塵は</p>	<p>版、古聖も亦た難くせり</p>	<p>版、屈くじ)けたるが</p>	<p>版、火、曰(まこと)に</p>	<p>版、堯戸は比屋、封ず可し</p>	<p>版、紂民は編戸、戮す可し</p>	<p>版、日月は東流す。南斗は随い</p>	<p>版、摧(うせ)んじかども</p>	<p>朱、誰か実を見たる 誰か実を見ん</p>	<p>版、奇秀たる／霊異なる</p>

新文庫所蔵『秘蔵宝鑑』巻中翻刻

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
縛 <small>はく</small> せ被る	坐 <small>ざ</small> 臧 <small>ざん</small> をも断 <small>つ</small> る而已	相和 <small>あひな</small> すること如何	然 <small>しか</small> るを今	真言 <small>まごころ</small> 乗 <small>のり</small> とは	出 <small>い</small> る期 <small>き</small> 無し	斯 <small>この</small> の言 <small>ことば</small> 、導 <small>ま</small> うこと莫 <small>な</small> れ	一命 <small>ひとこと</small> の如 <small>ごと</small> きは	天 <small>あま</small> (はるか)に殊 <small>こと</small> (こと)なり	然 <small>しか</small> るに今	自己 <small>おのれ</small> が	口 <small>くち</small> には是 <small>これ</small> すれども	之 <small>これ</small> れに違 <small>たが</small> へば	若使 <small>もし</small> (もし)主上 <small>しゅじやう</small> 、之 <small>これ</small> を行 <small>な</small> へば
縛 <small>はく</small> せ被る・縛 <small>しば</small> は被る	坐 <small>ざ</small> 臧 <small>ざん</small> して断 <small>つ</small> る而已	相 <small>あひ</small> 和 <small>な</small> せんこと如何	頼 <small>たの</small> ・然 <small>しか</small> るを今 根 <small>ね</small> ・然 <small>しか</small> るに今	真言 <small>まごころ</small> 乗 <small>のり</small> とは	出 <small>い</small> 期 <small>き</small> 無し	頼 <small>たの</small> ・斯 <small>この</small> の言 <small>ことば</small> 、導 <small>ま</small> うこと莫 <small>な</small> れ 根 <small>ね</small> ・導 <small>ま</small> うこと莫 <small>な</small> れ、斯 <small>この</small> の言 <small>ことば</small>	一命 <small>ひとこと</small> の如 <small>ごと</small> きは	天 <small>あま</small> 殊 <small>こと</small> なり・天 <small>あま</small> (はるか)に殊 <small>こと</small> (こと)なり	頼 <small>たの</small> ・然 <small>しか</small> るを今 根 <small>ね</small> ・然 <small>しか</small> るに今	自己 <small>おのれ</small> の	口 <small>くち</small> には是 <small>これ</small> すれども	之 <small>これ</small> れに違 <small>たが</small> へば	若使 <small>たとい</small> (たとい)主上 <small>しゅじやう</small> 、之 <small>これ</small> を行 <small>な</small> え
縛 <small>はく</small> せ被る	坐 <small>ざ</small> 臧 <small>ざん</small> の断 <small>つ</small> る而已	相和 <small>あひな</small> せんこと如何	然 <small>しか</small> るに今	真言 <small>まごころ</small> 乗 <small>のり</small> という者	出 <small>い</small> 期 <small>き</small> 無 <small>く</small> ん	導 <small>ま</small> うこと莫 <small>な</small> れ、斯 <small>この</small> の言 <small>ことば</small>	一 <small>ひと</small> たび命 <small>こと</small> ずるが如 <small>ごと</small> きは	天 <small>あま</small> (はるか)に殊 <small>こと</small> なり	然 <small>しか</small> るに今	自己 <small>おのれ</small> の	口 <small>くち</small> は是 <small>これ</small> なれども	之 <small>これ</small> れに違 <small>たが</small> へば	若使 <small>もし</small> (もし)主上 <small>しゅじやう</small> 、之 <small>これ</small> を行 <small>な</small> へば
朱 <small>しゆ</small> ・縛 <small>はく</small> (縛 <small>しば</small>)被る	版 <small>はん</small> ・坐 <small>ざ</small> 臧 <small>ざん</small> をも断 <small>つ</small> る而已	版 <small>はん</small> ・相和 <small>あひな</small> すること如何	版 <small>はん</small> ・然 <small>しか</small> るに今	朱 <small>しゆ</small> ・真言 <small>まごころ</small> 乗 <small>のり</small> という者	版 <small>はん</small> ・出 <small>い</small> 期 <small>き</small> 無 <small>く</small> ん	版 <small>はん</small> ・斯 <small>この</small> の言 <small>ことば</small> 、導 <small>ま</small> うこと莫 <small>な</small> れ	朱 <small>しゆ</small> ・一 <small>ひと</small> たび命 <small>こと</small> ずるが如 <small>ごと</small> きは	朱 <small>しゆ</small> ・天 <small>あま</small> (はるか)に殊 <small>こと</small> なり	版 <small>はん</small> ・然 <small>しか</small> るを今	朱 <small>しゆ</small> ・自己 <small>おのれ</small> (自己 <small>おのれ</small>)の	版 <small>はん</small> ・口 <small>くち</small> は是 <small>これ</small> なれども	朱 <small>しゆ</small> ・之 <small>これ</small> れに違 <small>たが</small> うときは	版 <small>はん</small> ・若使 <small>もし</small> (もし)主上 <small>しゅじやう</small> 、之 <small>これ</small> を行 <small>な</small> へば 朱 <small>しゆ</small> ・若し主上 <small>しゅじやう</small> をして、之 <small>これ</small> を行 <small>な</small> わ使 <small>つか</small> むるときは

42	仏に至ることを得	仏に至ることを得	仏に至ることを得	仏に至ることを得	朱・仏に至ることを得
41	太虚空の湛然常寂なるが如し	太虚空の如くして湛然として常寂なり	太虚空の湛然常寂なるが如し	太虚空の湛然常寂なるが如し	朱・太虚空の湛然常寂なるが如し
40	二乗の人、声聞は	二乗の人あり。声聞は	二乗の人は声聞は	二乗の人は声聞は	朱・二乗の人は、声聞は
39	転ぜずして	転ぜず	転ぜず	転ぜず	朱・転ぜず
38	深く観念し	深く観念し	深く観念す	深く観念す	朱・深く観念す
37	十二因縁を生ずるを	十二因縁を生ずるを	十二因縁を生ずるを	十二因縁を生ずるを	朱・十二因縁を生ずるを
36	要覧の者、閻耳	要覧の者、閻かん(閻(み)よ)耳	要覧の者は閻せん耳	要覧の者は閻せん耳	朱・要覧の者は閻せん耳
35	文煩わしくして	文煩わしければ	文煩わしければ	文煩わしければ	朱・文煩わしゅうして
34	所由を説きたまえり。事：	所由の事を説きたまう	所由を説きたまえり。事：	所由を説きたまう事、	朱・所由を説きたまえり。事：
33	極めて多し	極めて多かりき	極めて多し	極めて多し	朱・極めて多かりき
32	之れに容る	之れに容る	之れを容る	版・之れに容る	朱・之れを容る
31	心無けれども／念無けれども	心無けれども／念無けれども	無心なれども／無念なれども	版・心無けれども／念無けれども	朱・無心なれども／無念なれども
30	召(よ)ばざれども	召(め)さざれども・召(よ)ばざれども	召(よ)ばざれども	版・召(め)さざれども	朱・召(まね)かざれども

運敵『纂解』の読みと『堅康本』の読みを比較すると、次のようになる。

(1) 運敵『纂解』の読みと『堅康本』の朱書きの読みが同じもの：234,5,6,8,9,10,12,14,15,18,19,20,22,23,24,25,26, 27,28,31,32,34,35,36,38,39,40,41,42

(2) 運敵『纂解』の読みと『堅康本』の印字された読みが同じもの：1,7,11,13,16,17,21,29,33,37

(3) 運敵『纂解』の読みが『堅康本』の朱書き・印字された読みのいずれとも異なるもの：30

(1) の、運敵『纂解』の読みと、『堅康本』の印字された読みは相違するものの、朱書きによって運敵『纂解』の読みが反映されている箇所が三十一箇所。(2) の、運敵『纂解』の読みと、『堅康本』の印字された読みとがそもそも同じものが十箇所ある。すなわち、『堅康本』には(3)の一箇所を除いて、運敵『纂解』の読みが、印字・朱書きの違いはあれ反映されているということがわかる。したがって、堅康が活躍した江戸後期の智積院に、運敵の読みが伝承されていたであろうことが前稿同様、『秘蔵宝鑰』巻中においても確認することができた。続いて前稿同様に、(2) の『堅康本』に印字された読みが運敵『纂解』の読みと同じであるにもかかわらず、さらに別の読みが朱によって併記されている十箇所の読みに関して、何に基づいたものなのかを確認するため、『新文庫本』の読みとの比較を行うと次のようになる。

① 十箇所の朱書きの読みが『新文庫本』にみられるもの：1,7,21,29,33

② 十箇所の朱書きの読みが『新文庫本』にみられないもの：11,13,16,17,37

前稿の分析では(2)の朱書きの多くが『新文庫本』に記された読みと同じであったため、この朱書きが『新文庫本』に基づいた読みであるとの推測を行った。一方、本稿では、②のように『新文庫本』にみられない読みも五箇所確認された。なお、この五箇所の読みは頼諭『勘註』の読みとも異なっている。したがって、『堅康本』にみられるこの五箇所の朱書きの読みは頼諭『勘註』、『新文庫本』、運敵『纂解』のいずれにもみられない読み

ということである。前稿にて、「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」（現在のところ所在不明）について言及を行い、それが『新文庫本』の読みを多く採用したもので、運敵『纂解』とは異なる読みを示していたであろうという推測を行った。堅康本の奥書(7)を信頼するならば、『堅康本』の朱書きは運敵が校合して加点したものであるため、この五箇所の読みも「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」に基づいたものである。ただし、少なくともこの五箇所については、前稿の推測「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」が『新文庫本』の読みを多く採用したものである」とは異なり、『新文庫本』由来の読みでないといえよう。運敵が『纂解』とは異なる読みを、独自に「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」に付していた可能性も指摘できる。一方で、『新文庫本』以外の史料も参考にしてきた可能性も大いに考えうるであろう。

七、おわりに

以上、前稿の『秘蔵宝鑰』巻上に引き続き、本稿では『秘蔵宝鑰』巻中について、『新文庫本』の翻刻を行った。さらに『新文庫本』の翻刻から得られた読みと、頼瑠『勘註』、運敵『纂解』、『堅康本』に記される読みに関して、前稿と同様の比較検討をおこなった。

比較検討の結果を、前稿の検討結果を基に改めて示すと以下のとおりである。

- ・『新文庫本』の頼瑠点と、頼瑠『勘註』の読みとは多数の相違点があるので、『新文庫本』の頼瑠点は、あくまでも「賢秀に伝承された頼瑠の読み」と考えられる。
- ・運敵『纂解』の読みには、『新文庫本』にみられる頼瑠点、根来点が適宜採用されているので、運敵は特定の一つの読みを重視したのではない。

・『堅康本』の朱書きの読みは運敵『纂解』の読みを反映したものが多数である。

以上の点が、概ね前稿と同様の傾向を示していた。したがって、巻上の分析より導き出されたこれらの推測が、巻中の分析によってさらに補強された結果となったといえよう。

一方、前回の報告とは若干異なった傾向もみられた。奥書によれば、『堅康本』の朱書きは運敵の点を反映させたものであるが、運敵『纂解』の読みと『堅康本』の朱書きが完全に一致するわけではない。そこで『堅康本』の朱書きの読みが、運敵『纂解』の読みと異なる部分について、前稿ではその大部分が『新文庫本』にみられることから、堅康が閲覧した「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」の読みには、『新文庫本』の読みが多く反映されていたのではないかと推測した。その点について本稿の結果をみると、前稿と同様『新文庫本』の読みもみられたが、それに加え、『新文庫本』の読みと異なるものも複数箇所においてみられた。本稿の結果を踏まえると、「運敵の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」は、『新文庫本』のみならず、他の史料をも参考にしていたことをより強く意識させる結果となった。

引き続き、『秘蔵宝鑰』巻下の報告を行いたい。

註

(一) 【巻上】

墨点声仮名朱引朱ノ句切朱ノ導 頼―御本也／／

朱点声仮名以別本写之 是又根来寺点也／／

【巻中】

墨声墨仮名并点朱引朱ノ導句切 頼―御点也／／

朱点朱仮名朱声以別本点了 是亦根来寺点也／／

【巻下】

墨点墨声并仮名朱引朱導朱ノ句切 (頼―御本也)／／

朱声朱仮名。以別本之根来寺点写之／／

- (2) ただし、頼瑠『秘藏宝鑰勘註』に関しては、閲覧の容易さ等を考慮して『真言宗全書』巻一―所収のものを使用したため、必ずしもこの読みが「頼瑠の読み」とは言い切れないことには注意が必要である。なお智積院に所蔵されている『秘藏宝鑰勘註』については前稿註8参照。
- (3) 比較検討にあたっては『智山全書』巻七所収の『秘藏宝鑰纂解』を使用した。なお智積院に所蔵されている『秘藏宝鑰纂解』については前稿註9参照。
- (4) 『新文庫本』巻上―巻下全体の書誌情報については、前稿参照。
- (5) 『古語大鑑』巻二(東京大学出版会・二〇一六)を参照した。
- (6) 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店・一九九九)を参照した。
- (7) 「慶安元年五月念日旧点校合以墨加之」安楽寿院沙門運敵之／
 〔堅康本〕『菩提心論』(智山書庫二―四九―一八)一
 六丁左―裏表紙裏)

〈キーワード〉

秘藏宝鑰、智積院、十卷章、頼瑠、運敵